

本トビラ・(本文共紙・裏は白)

参照用

比企氏の乱 実史

永井晋

まつやま書房

参照用

はじめに

比企氏に関する所感

はじめに、ざつくばらんに所感に書こうと思う。その方が著者の意図が伝わるだろう。

比企氏は、源頼朝・頼家父子に忠実に仕えた家であった。その事は、否定のしようがない。源家に対して忠実であり続けた比企氏と、源頼朝夫人の家として鎌倉幕府に食い込んでいこうとする北条氏では、あまりにも違いすぎる。

本書を読んでいくと、齒がゆく思われる方も多いのではないだろうか。書いている筆者もそうである。比企氏は、家族を連れて京都を離れ、武蔵国比企郡を請所^{うけしよ}として支配できる土地を確保した。また、国司の命令系統から外れたの

参照用

で、比企氏の裁量で源頼朝に仕送りをするのが可能であった。比企尼は才知に富んだ人であり、乳母として仕えた縁で知り合った源頼朝の成功に賭け、その賭けは大当たりした。鎌倉幕府宿老比企氏の成立である。

比企尼の周囲をみると、娘婿の平賀義信は頼朝が最も信頼を置く源氏の一門で、嫡子源頼家の後見として重きをなした。安達盛長も頼朝の腹心となり、幕府の役職として守護職を勤めた。比企氏もまた、比企朝宗は頼朝が側に置く文官となり、比企能員は武家として振る舞うことができるように経歴を積んでいた。比企尼・源頼朝の健在な時代が、比企氏の全盛時代である。ここまでは、成長の物語なので読んでいて気持ちがいいと思う。

しかし、源頼家政権になると、源頼朝に忠実であろうとして自分で判断してこなかった比企能員が、政治情勢を読めないという致命的な弱点を曝してしまふ。疑うことを知らない善良な老人が、比企能員に対する適切な評価であろう。

参照用

源頼家政権を支えようとして北条氏の陰謀を察知した梶原景時をなぜ北条氏と共に滅ぼしてしまふのか、比企氏の乱（一二〇三年）では自分を殺そうとしている陰謀に気付かず、北条時政の館に事前に呼ばれたことを奇妙とも思わず、法会で着る白水干しろすいかんでのこのこ出て行って暗殺されてしまふ。その遺族も、比企能員が暗殺されたと知って將軍源頼家の御所に行こうとせず、味方を集めて北条時政に対抗しようともせず、悲嘆に暮れているうちに小御所を囲まれて滅ぼされてしまふ悲劇を招く。比企氏を評価する言葉は、無能の善人である。

このような人が舅となった源頼家も悲劇であろうが、源頼家の舅として鎌倉幕府の中で権力を築こうともしない比企氏とは何者なのかと彼らの頭の中を覗きたくなる。実力以上の地位について、思考停止に陥っていたんじゃないですかと問いただしたい気分である。源頼朝という指導者を失った後の比企氏は、あまりに無策であった。

はじめに

参照用

さらに言えば、死霊として出てきたのに、滅ぼした家を崇ろうともせず、往生させてくれと北条政村に供養を願う讃岐局の霊もなんなのだろうと思う。讃岐局は、北条時政・北条政子が敵であると認識する前に死んでいたのであるうかと疑いたくなる。

鎌倉時代後期の比企氏は、北条氏一門甘縄あまなわし氏の側近であり、文人として一目置かれた比企助員で終わる。比企助員の文人としての評価が、最後の清涼剤ともいえる効果を果たしてくれるだろうか。

鎌倉時代の比企氏、それは源頼朝・頼家に対して忠実に尽くすことに専念し、その限りにおいては有能であったが、比企氏を繁栄させることを考えず、頼朝の指示がなくなると動けなくなる能吏のうりである。実力以上の地位に就いて何をしていたかわからなくなったこと、それが比企氏の悲劇である。

はじめに

参照用



伝比企能員館跡 城ヶ谷 (埼玉県 東松山市)



慈光寺 (埼玉県 ときがわ町)

参照用

比企の乱——実史 目次

はじめに

- 比企氏に関する所感 1
- 比企氏の立場 6
- 浅羽本「吉見系図」 7
- 比企氏が持つ意識 13

第一章 治承寿永の内乱

一 安達盛長の活動

- 比企尼と安達盛長 20
- 頼朝挙兵前夜 23
- 源頼朝と安達盛長 27
- 伊豆国の事情 30

二 治承寿永の内乱

- 比企氏の鎌倉進出 34
- 源頼家誕生 37
- 源頼朝の使者 39
- 木曾義仲滅亡後 42
- 平氏追討に出陣 46

第二章 源頼朝の時代……………51

- 頼朝の側に戻されて……………52
- 比企尼の晩年……………56
- 『吾妻鏡』から消された源義経残党追捕……………58
- 佐竹義季一件……………61
- 源頼家の着甲始……………63
- 文治の奥州合戦……………68
- 大河兼任の乱……………72
- 源頼朝上洛……………76
- 穏やかな日々……………80
- 建久六年の源頼朝上洛……………84

第三章 源頼家政権……………87

- 世代交代……………88
- 三左衛門事件から明らかになる『吾妻鏡』の書き方……………90
- 十三人の合議制……………93
- 安達景盛妻一件……………100
- 梶原景時事件……………107
- 鶴岡放生会の突然変更……………112
- 阿野全成事件……………118

第四章

比企氏の乱

源頼家病に倒れる
源頼家の遺産相続
源頼家薨去の偽り
事件の始まり
『吾妻鏡』と『愚管抄』
比企能員暗殺
比企氏謀叛
小御所合戦

123
126
124
130
134
136
138
141
145

第五章

比企氏の乱後の比企氏

北条時政政権の始動
証菩提寺供僧円顕
讃岐局の亡霊
甘縄北条氏と比企助員
追加十二首
鎌倉時代の比企氏と戦国時代の比企氏

151
152
156
161
165
170
173

あとがき

175

主要参考文献

181

参照用

第一章
治承寿永の内乱

参照用

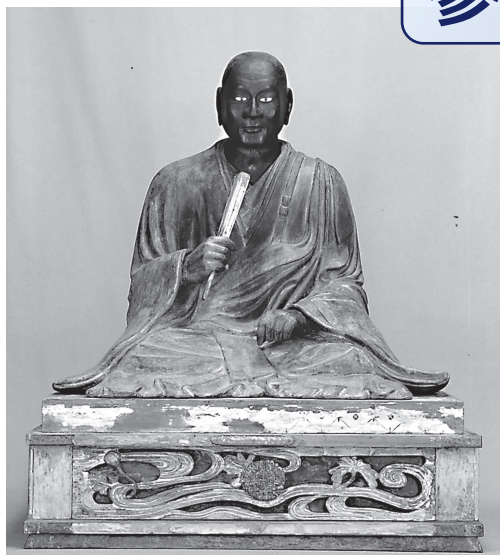
一 安達盛長の活動

比企尼と安達盛長

比企尼の娘婿安達盛長の系譜は、不明とせざるを得ない。「吉見系図」にみられる比企尼の婿は、『吾妻鏡』の記述と齟齬しないので信用してよい。

よくある誤解が、武蔵国足立郡司足立遠元の家と同系とする混同である。埼玉県桶川市・鴻巣市に安達氏ゆかりの伝承地があり、さいたま市大宮区に足立遠元館跡の伝承地がある（「小島家文書」）。両家が足立郡にゆかりを持つことは間違いないので、郡司の家と所領を得て入ってきた家と考えれば、併存に問題はないだろう。安達氏と足立氏を切り分ければ、安達盛長は京下りか、比企尼に見いだされた地元の武士かを系譜から推測することになる。

参照用



安達藤九郎盛長坐像
(放光寺所蔵 埼玉県鴻巣市教育委員会写真提供)

『尊卑分脈』は、安達氏を藤原北家魚名流で、藤成から分かれた家とする。この一流には、京都と坂東を往来しながら活動する秀郷流藤原氏がいる。盛長は、京都を本貫にするとも、坂東を本貫にするとも考えられる。『源平闘諍録』「右兵衛佐頼朝、伊東の三女に嫁する事」は、盛長を摂政藤原伊尹の末流と記している。この一流は、『権記』

参照用

を残した藤原行成の子孫世尊寺家が公卿として存続している。藤成流より家格が高いので、京都で官職につけない庶流や庶子が比企尼の武蔵国下向に同行した可能性を考えてもよい。比企尼が武蔵国に下ったのは、源頼朝が伊豆国配流となった永暦元年（一一六〇）三月の半年後、永暦元年秋である。

夫の比企遠宗は、比企郡司を勤める武蔵国の地方官人である。比企尼は鳥羽院政派・二条天皇親政派に連なる女性で、縁あつて源頼朝の乳母を勤めた。源頼朝が宮仕えで困らないようにと、教育を託された官人の娘と推測している。比企尼は、坂東の地方豪族の娘にはない考え方をする。源義朝が舅の鳥羽院殿上人藤原季範と相談し、頼朝の乳母に選んだ可能性を考えてよいだろう。藤原季範の家は、後白河院政で冷遇され、所領の熱田社に下向し、神主家になった。源義朝の時代には殿上人として史料に現れるが、鎌倉幕府が成立した時は神主家である。

参照用

あとがき

筆者が比企氏の歴史を通して思うことは、実力以上の地位に昇ったが故に失敗をした家である。

比企尼は、頼朝の乳母として過剰ともいえる愛情を注ぎ、支援をしていた。『吾妻鏡』に登場する数名の乳母の中で、比企尼と寒河尼（小山政光妻）が突出した存在と考えている。

問題は、その子供達の代にある。比企遠宗と比企尼との間に男子はなく、家族として迎えた比企朝宗と比企能員が頼朝の側近として活動するようになった。この二人は頼朝の側で忠実に働いているが、頼朝の腹心として権力を振るわないのである。源頼朝が伊豆国に配流になったのは永暦元年（一一六〇）、比企

氏が武蔵国比企郡に下向したのもこの年秋である。比企尼は頼朝に仕送りを続け、娘婿の安達盛長を頼朝の腹心として派遣した。この時、比企尼もその子供達も、頼朝に才覚はあつても、それを活かす機会が来るとは考えていなかったであろう。比企氏には、頼朝の勢力拡大に連動して勢力を伸ばしていく動きが見られないのである。ひたすら、頼朝に忠実に仕える家として尽くしていた。

それが、比企氏の悲劇を招く原因である。頼朝の指示があれば有能であるが、自分で政治を動かす思考ができない。敵である北条氏に味方をして、味方の梶原景時を滅ぼしたのが最大の失敗と考えてもよいだろう。

比企能員は、比企氏の乱で暗殺されるまで、自分が北条時政に殺されるとは考えていなかった。比企能員暗殺後もそうである。一族を集め、味方を集めて源頼家御所に移動し、幕府を掌握するのが最優先課題であった。実際にとった行動は、頼家の後継者一幡の居る小御所に集まり、能員暗殺の悲嘆にくれて何

参照用

も手を打っていなかった。

北条氏の命令によって比企氏追討に向かった御家人が比企氏が武装していないのを見て、小御所の中に居る比企氏を討てと命じられているので、小御所から出る者の命は取らないと出てくるように勧める展開となった。比企氏の行動を見ていれば、比企氏が謀叛を企んでいなかったことは明らかである。何もしなかったが故に、謀叛の汚名を着せられて滅ぼされた。それが、比企氏の最期であった。

生き延びた人々の中に、鎌倉後期に北条氏一門甘繩氏の被官となつて勢力を盛り返し、早歌の調曲が巧みなことで名を残した比企助員があらわれた。鎌倉後期に文芸を好む武士として一瞬の光芒を放った比企助員が、史実として書き残される鎌倉時代の比企氏の最後の人となる。

参照用

主要参考文献

- ・石井進「比企一族と信濃、北陸道」『石井進著作集 第五集 鎌倉武士の実像』岩波書店 二〇〇五年
- ・石井進「武士の置文と系図―小代氏の場合―」『石井進著作集 第五集 鎌倉武士の実像』岩波書店 二〇〇五年
- ・上杉和彦『大江広元』(吉川弘文館人物叢書 二〇〇五年)
- ・岡田清一『北条義時―これ運命の縮まるべき端か―』(ミネルヴァ書房 二〇一九年)
- ・神奈川県立金沢文庫『企画展図録 頼朝 範頼 義経―武州金沢につたわる史実と伝説』(神奈川県立金沢文庫 二〇〇五年)
- ・清水久夫「武蔵国比企郡の請所について」(『埼玉地方史』三号 一九七七年)
- ・田中稔「仁和寺文書拾遺」(『史学雑誌』六八卷九号 一九五九年)
- ・外村久江「早歌『撰要両曲卷』の成立と比企助員」(『日本歌謡研究』二〇号 一九八一年)
- ・外村南都子「早歌『撰要両曲集』『続遺抄の研究』―比企助員の仕事をめぐって―」(『国文白百合』二九号 一九九八年)
- ・外村久江『早歌の研究』(至文堂 一九七三年)
- ・永井晋「比企氏の乱の基礎的考察」(『埼玉地方史』三七号 一九九七年)
- ・永井晋『鎌倉幕府の転換点―『吾妻鏡』を読み直す―』(日本放送出版協会、NHKブックス 二〇〇〇年、復刊吉川弘文館 二〇一九年)
- ・永井晋『北条政子・義時の謀略―鎌倉幕府争乱期を読む―』(ベストブックス 二〇二〇年)

参照用

【著者紹介】

永井晋（ながいすすむ）

1959年生まれ。國學院大学大学院博士課程後期中退。國學院大学博士（歴史学）。神奈川県立金沢文庫主任学芸員・神奈川県立歴史博物館企画普及課長を経て、現在関東学院大学客員教授。

主要著書

- ・『鎌倉幕府の転換点—『吾妻鏡』を読み直す』（日本放送出版協会 2000年、2019年吉川弘文館より復刊）
- ・『金沢貞顕』（吉川弘文館 2003年）
- ・『金沢北条氏の研究』（八木書房 2006年）
- ・『源頼政と木曾義仲—勝者になれなかった源氏』（中公文庫 2015年）
- ・『平氏が語る源平争乱』（吉川弘文館 2019年）
- ・『八条院の世界』（山川出版社 2021年）
- ・『鎌倉幕府はなぜ滅びたのか』（吉川弘文館 2022年）

比企氏の乱 — 実史

2022年9月5日 初版第一刷発行

著者 永井晋

発行者 山本正史

印刷 株式会社シナノ

発行所 まつやま書房

〒355-0017 埼玉県東松山市松葉町3-2-5

Tel.0493-22-4162 Fax.0493-22-4460

郵便振替 00190-3-70394

URL:<http://www.matsuyama-syobou.com/>

© SUSUMU NAGAI

ISBN 978-4-89623-186-1 C0021

著者・出版社に無断で、この本の内容を転載・コピー・写真・絵画その他これに準ずるものに利用することは著作権法に違反します。乱丁・落丁本はお取り替えいたします。定価はカバー・表紙に印刷してあります。